

2021年度 大学院野村佐紀子展コラボレーション参加者リスト・プロフィールならびに作品紹介

	名前	作品タイトル	ジャンル	時間	作品紹介	専門分野・研究テーマ	顔写真
1	王 子華(オウ・シカ)	美しい物語	実験映像	1.39min	この作品は、日々の生活の中で見つけた美しい「物語」と自分で撮った面白い写真から編み上げたものです。生活の中で出会った素敵なもの、素晴らしいものを記録し、作品にすることで、不愉快なことすら忘れることができる気がします。私の見つけた喜びを分かち合っていただけたらと思います。	陶芸：日本式の急須の研究と制作	
2	王 暢(オウ・チョウ)	早市儿	ドキュメンタリー	5.25min	中国の東北地方に人々から「早市儿」(朝市)と呼ばれている市場があります。そこでは、人々はいつも忙しく買い物をしています。これは、自分が体験した、そんな市井の人々の活気に溢れる生活の一コマとその雰囲気を伝えるものです。そうした人々の生活文化を伝えることができるように、撮影の際のアングルや映像の構図によって、実際には相互に無関係な多様な人々をある関係にまとめ上げてみました。そのことによって人々の温かみを伝えられればと思います。この作品をご覧になった皆さんにもぜひそこを訪れ、体験してもらえればと思います。	グラフィックデザイン・ラフィックデザインにおける木版画の印刷表現の研究	
3	呉 超(ゴ・チョウ)	hand	実験映像	5min	私のテーマは「手」です。手は、人間や霊長類の腕の先端の一部で、5本の指と手のひらからなります。手は私たちの体の一部であり、その人の精神の状態や気分が現れる場所であるとともに、身振りなどにも用いら、またその人の年齢を伝えもします。「両手万能」ということわざがあります。人間の手にはいろいろな機能があるという意味です。手は人間の中で最も柔軟な器官といっても過言ではないと思います。私の作品では、被写体は手ですが、それだけではありません。手を媒介にして、人と人との関係も表現したいと思いました。手は人と人との関係を表すこともできます。親密に手をつないだり、曖昧に撫でたり、しっかりと手を握り合ったり、という具合にです。野村先生の作品は、人と愛を、身体やその場の状態で見事に表現していると思います。そこから大変大きな刺激を受け、手の部分をモチーフに作品を制作することにしました。	視覚伝達デザイン：引きこもりの 内面世界表現	
4	蔣 宜彤(ショウ・ギトウ)	雨の夢	実験映像	5min	私の作品のコンセプトは、雨が降って再び空に戻るまで、雨の滴が水の形で人間のあいだを通りながら人間観察をするというものです。その際、雨の滴の視点で、人が幼年から、青年を経て老年に至るまでの一生の時間の変化を同時に追いかけているように観察しています。雨滴が存在する時間は短かく儚いものです。だから、それが見たものは「夢」だったかもしれない。そこで「雨の夢」というタイトルをつけました。	デザイン・グラフィック：デザインにおけるコラージュ表現の可能性	
5	張 雲霆(チョウ・ウンテイ)	思い出の町	実験映像	4min	現在中国で私が住んでいる町のビルの1階と2階は、中国の1960年代の古い町に改装されていました。私が現代人としてそこに立ち入った時、何か違う年代感を感じました。そんな感じ方を作品にしてみました。	日本の観光地の土産品包装の研究	
6	任 科傑(ニン・カケツ)	世界と競う光	実験映像	3.37min	この世のすべてのものは形を持っていません。ただ「光」があるときだけ、その下のみ、それらはその外観を表すことができるだけのです。だから、私たちが世界を見るとき、私たちはその「光」も見ていることになるのです。	陶芸：皿の制作	
7	藤根 葉子(ワラビネ・ヨウコ)	海	実験映像	4.20min	日が昇り、活動的な昼間を過ごし、日が沈み、夜が訪れる。海で見た時間の経過に、人間の人生が重なって見えた。	染織	
	指導者コメント：文芝瑛	今回のコラボ企画は、下関市立美術館での特別展「野村佐紀子 写真展『海』」の開催に合わせて構想された、東亜大学大学院総合学術研究科デザイン専攻の大学院生7名による映像作品制作の企画です。令和3年度後期の大学院における授業科目である「映像学」の中で野村佐紀子氏の写真作品を取り上げ、各自がそれらの作品を観ることから着想し、映像作品としてかたちへ制作を行なったものです。制作の過程において、まず野村氏のこれまでの様々な作品を見ながら、それぞれが感じたことや共感したことについてみんなで話し合いました。その上で、それぞれがインスピレーションを受けたものからテーマを見つけ、作品制作に取りかかりました。 王子華(オウ・シカ)さんは、日本に来て体験した楽しかった思い出をテーマに明るいテンポで描いています。王暢(オウ・チョウ)さんは、東北地方の「早市儿」という市場を舞台にした日常の風景をドキュメンタリー風に仕上げています。呉超(ゴ・チョウ)さんは「手」をテーマに人と人との絆について考えさせる内容になっています。蔣宜彤(ショウ・ギトウ)さんは、「雨」の記憶をテーマにし、時間の変化と人生を物語る作品になっています。張雲霆(チョウ・ウンテイ)さんは、中国の1960年代の古い街並みを再現した場所を歩き回りながら、若者の目線から感じる過去の歴史への思いを表現しています。任科傑(ニン・カケツ)さんは、「光を探る旅」を通して「光」の意味を探る物語に仕上げました。藤根葉子(ワラビネ・ヨウコ)さんは、日が登っては沈んでいく海の様子を通して「生きる」ことについて問いかける作品になっています。同じ一つの作品を観ていても、人によって異なる感じ方や受け止め方があるように、完成した作品は「人間同志の関係」「光と影の関係」「海に対する思い」「日常のある風景」「時空を超える思い」など、7名のそれぞれの思いが詰まった、独自の世界として結実しています。					